中央アジアにおける ウズベク族支配時代のイクター

堀川 徹^{*}

ABSTRACT Toru HORIKAWA, *Iqtā' in Central Asia under the Uzbek Dynasties*: In Central Asia, the term *iqtā'* appeared in a chronicle again in the late 16th century. Soviet historians understood that it was similar to *soyūrghāl* or *tankhvāh* and was used as an outdated term having no substance. As B. Ahmedov pointed out, however, the *iqtā'* meant that the members of the royal family and distinguished *amīrs* were granted the administrative and the tax immunity at a certain area by the *khān* under the agreement that they would offer military service and pay a portion of their tax revenue to the state. The *iqtā'* was different from the *soyūrghāl* appearing in the documents, which meant the right given to the moslem saints or the learned men and *tankhvāh* given to the soldiers, but was synonymous with the *soyūrghāl* in the chronicles in those centuries. It was related to the *khān*'s appanage grant policy and to the tradition of *soyūrghāl* in the previous eras', but was not the same with the military *iqtā'* system.

I

ブライフ朝のイラク征服(946年)を契機に、軍人にイクター(*iqtā'*)を授与し、土地の直接管理と徴税権とを委ねる新体制が開始された。これが所謂軍事イクター制で、その後、イスラーム世界の諸王朝に継承されていった。大セルジューク朝時代に新たな展開を見せたイクター制は、イラン・中央アジアにおいては、イル・ハン国のガザン・ハンによるイクター施行を経て、14世紀以降、ソユルガル制⁽¹⁾にとってかわられたと考えられている。ところが、16世紀初頭に遊牧ウズベク族が中央アジアを征服してのち、そこにおいて、16世紀末から18世紀初頭に書かれた年代記には、再び *iqtā'* の語が登場する。現在知られている範囲では、文献の数こそ限られているものの、イスラーム中世社会を規定し⁽²⁾

* 京都外国語大学講師

たこの術語が再度見られるのは非常に興味深いことである。

16世紀に再登場する *iqṭā'* に関しては、ソヴェト連邦の研究者を中心として幾つかの論考が発表されている。まず、ソユルガル制の総合的な研究を行なった И. П. Петрушевский は、イランに例をとって「封建的制度としてのイクターは16～18世紀には既に存在せず、ソユルガル制とティウル制とにその位置を譲っている。《*iqṭā'*》の語は16世紀にも17世紀にも、そして18世紀でさえも、すなわち、《*soyūrghāl*》や《*tiül*》という術語およびそれらによって示される社会制度が広汎な広がりを得た時代にも、著述歴史文献に見られる。もっとも、はなはだ稀有にではあるが。」「しかしながら、16～18世紀の著述史料では、《*iqṭā'*》は既に正確な法律用語ではな⁽³⁾く、「漠然と《下賜されたもの》といった意味で、イクターに代わる封建的社会制度を標示する為に、その同義語として使用されていた」と述べている。中央アジアの土地所有制度に深い造詣を持つ П. П. Иванов は、16世紀に見られる *iqṭā'* は、17世紀以降それが全く姿を見せずその意味をすっかり《*tankhā*》に譲っている故、「多分、文語的表現の伝統的残存物として、主に保持されていたと結論」した。そして、*iqṭā'* がある意味ではソユルガルと、ある意味ではタンハーと一致していると述⁽⁴⁾べた。その後公にされた諸研究で、ソ連邦の研究者はほぼ Иванов と同様の見解を示している。例えば、М. Абдураимов はその著書で、ウズベク族による中央アジア支配時代の土地制度を全般にわたって研究したが、「述語《*iqṭā'*》は諸史料において、《*tankhā*》あるいは《*tiül*》その他の述語の同義語」であり、16～18世紀に《*iqṭā'*》と《*tankhā*》とは「一時的な采邑の恩賜を標示していた」点が共通であったと記⁽⁵⁾している。以上概観した如く、従来のソ連邦における研究では、16～18世紀に再登場する *iqṭā'* は独自の実体を持たず、*soyūrghāl*, *tiyül* (*tiül*), *tankhvāh* (*tankhā*) 等の同義語として使用されていたということで一致していた。しかしながら Петрушевский がこの時代のイランで書かれた著述史料を根拠とし、Ivanov が中央アジアでは17世紀以降 *iqṭā'* の語は現われないとの誤った事実認識に基づき、そして、Абдураимов も「タンハーはイクターの再帰形⁽⁷⁾」として、成立期の軍事イクター制の姿を念頭に置いて該時代の *iqṭā'* を論じている状況では、この問題に関する研究の深化は望むべくもなかった。

ところが近年、インドの Mansura Haider は、*tiyül* は 'Abdallāh Khān の統治時代（16世紀後半）の史料には現われないし、*tankhvāh* は単に文字通

り俸給の意味であるとして、両者と *iqṭā'* とを同一視することに反対した。そして、16世紀後半に「*iqṭā'* はハンやスルターンによって、その各々の領域内で、王族および貴頭に対して、軍事義務の見返りに割り当てられた」が、*‘Abd-allah Khān* の時に、これに「ある種の財務義務が付け加えられたようだ」と述べた。⁽⁸⁾しかし、Haider にしても、従来の研究者同様、当時の *iqṭā'* をある地域内に設置された、むしろ軍事イクター制開始当初のそのイメージに重ねて議論を進めているように思われる。また、16～17世紀の土地制度全般に互って論じようとしている為に、*iqṭā'* の問題を深く追求するには至らなかった。Haider とは別に、B. A. Ахмедов はこれまで研究者によってあまり利用されることのなかった、*Baḥr al-asrār* の大英図書館所蔵写本をも詳しく研究して、16～18世紀の *iqṭā'* についての再検討を行なっている。⁽⁹⁾

小論では、まず Ахмедов の論文内容を紹介し、それを基に、ウズベク族による中央アジア支配時代の *iqṭā'* の性格を検討する。次いで、Ахмедов 説の問題点を指摘して、この時代の史料に記された *iqṭā'* が如何なるものであったかを考察していきたい。

II

Ахмедов の論説は次の二つの骨子から成り立っている。その一つは、従来の研究者の主張する、*iqṭā'* と *soyūrghāl*, *tankhvāh* との類似性を否定すること、もう一つは、*iqṭā'* の持っていた性格を諸史料の分析を通して抽出することである。

いま彼の記述に従ってその説を紹介すると、まず、*soyūrghāl* は、16～17世紀には *iqṭā'* と並んで「恩賜された物」を標示する為に使用されていたが、その指示するものは必ずしも同一ではなかった。すなわち、16世紀には二つの術語は同じ意味を持っていた。それは、ハン家のメンバー、軍司令官、国家の要人に対して、その社会的立場に応じて下賜された、ある地方や地区である。そして、授与を受けた者は免税特権と行政権とが許されていた。しかし、17～18世紀に *soyūrghāl* の意味は変化する。それは、*sayyid*, *‘ulamā’* 等のイスラーム聖職者、顕要な学者に与えられるあらゆる種類の下賜物（土地・租税収入）を意味していた。Ахмедов はその事例を幾つか挙げているが、例えば *Baḥr al-asrār* には、ジャーン朝（アストラハーン朝）の *Nadir Muḥammad Khān* (1051/1642-1055/1645) の治世に、詩人の *Shaikh Naza‘ī* と *Maulānā*

Sharif Vāla, メドレッセの教授 Maulānā ‘Abd al-Mu’min Miyānkālī, 詩人で学者の Maulānā Niyāz 等が soyūrghāl を下賜されていたと記されている⁽¹⁰⁾。17世紀以降の soyūrghāl について補足すれば、恩賜された土地は世襲されたが、その土地に対する権利は、単にそこから上がる租税 (kharāj) の受領権であって、土地の所有権とか徴税権あるいは司法 - 行政権といった類の支配権を伴うものではなかった⁽¹¹⁾。

tankhvāh は iqtā‘ と全く別の意味を持っていた。すなわち、それは軍人・兵士や小官吏階級の俸給として、あまり広からぬ領域からの租税を下賜するものであった。それ故、16～18世紀の iqtā‘ とは全く異なっていたと結論した⁽¹²⁾。tankhvāh に関しては、Абдураимов の研究があるのでその要点を紹介して上述の説明を補足すると、17～19世紀の tankhvāh は、決して下賜された土地の所有権や徴税権を伴ったものではなかった。また、その土地に住む農民の支配権をも意味しなかった。タンハー保有者 (tankhvāh-dār) は台帳 (daftar) に登録され、彼らに俸給割当証書 (barāt) が発行された。こうした点から、tankhvāh は tiyūl や初期の iqtā‘ と類似していると言われるが、17～19世紀を通じて世襲所領へと変化していった。Ахмедов は18世紀後半に書かれた Risāla-yi Ḥabibiyya の記事を引用しているが、それには、もし君主が国家の「土地を贈物として某に下賜するのであれば、それが ‘ulamā’ や sayyid に与えられる場合には soyūrghāl と呼ばれ、もし戦士 (muqātilin) に対してならば tankhvāh と呼ばれた」⁽¹³⁾と記されている⁽¹⁴⁾。

以上の如く、Ахмедов は、当該時代の中央アジアにおいては、iqtā‘ と soyūrghāl あるいは tankhvāh とは類似のものではなく、全く別の制度を表わしていたとの結論を得て、次に iqtā‘ の性格規定に移る。そして、結論として以下の五箇条を掲げたのである。

- ① 中央アジアにおいて、検討した時代 (16～18世紀) の iqtā‘ は、行政権と免税特権とを許された、一定の領域の条件付き一時的な下賜であった。
- ② iqtā‘ 保有者は、王家のメンバー、顕要なアミール、軍事遊牧貴族であった。
- ③ iqtā‘ の広さは下賜される人物の社会的地位に依っていた。
- ④ 国庫への kharāj の一部の払い込みと軍務の負担によって、下賜は条件付けられていた。
- ⑤ iqtā‘ の分与、とくに広大なそれは、結局のところ国家の地方分権を招

(15)
いた。

上述の結論に至るまでに、Ахмедов は様々な事例を挙げて考証している。ここでは、その研究を土台として、今一度整理しなおしてみよう。

注(2)で述べた如く、iqṭā‘ の語が登場するのは三文献に限られており、その性格規定に十分な材料が揃っているとは言い難い。貧弱な資料より、まず、iqṭā‘ を授与するのは、確認できる範囲では、王朝の主権者であるハンあるいはそれに準ずる者であった。それを受領したのは、王族のスルターン——その中には、ハン家と系統を異にする者も時として含まれる——と、アミールと呼ばれるウズベク諸族の遊牧貴族が主であった（Ахмедов 結論②）。興味深い例としては、当時中央アジアの北方草原地帯に勢力を持っていた、カザク族の首長 Shighāi Khān とその子 Tavakkul が Khojand の町を、回暦989年（1581）に受領したことが挙げられる。⁽¹⁶⁾ほかに、軍人たち（‘asākīr）が iqṭā‘ を持っていたとの記事が一例見られるが、Ахмедов はこれには触れていない。

iqṭā‘ として与えられた対象物は、ある町、あるいはその周囲をも含めた地域、州（vilāyat）、そして複数の vilāyat とまちまちであった。その差はАхмедов が結論③で指摘したように、受領者の国内における地位、あるいはハンとの緊密度によっていた。とくに、ハンの皇子には広大な領域が下賜されていた。例えば、‘Abdallāh Khān の子 ‘Abd al-Mu‘min Sulṭān は Balkh とその周辺を iqṭā‘ として授与されたが、⁽¹⁷⁾その後、父の軍事援助によって Tokhāristān, Khuttal, そして Badakhshān の一部を自己の勢力下に収め、⁽¹⁸⁾結局、父親の ‘Abdallāh と対立するに至ったのである。Ахмедов が結論⑤で述べているのは、こうした事例を指してのことである。

iqṭā‘ 受領者が授与された iqṭā‘ に対して、如何なる権利を持っていたかといえ、第一に、その地方の支配権を挙げることができる。Sharaf-nāma によれば、‘Abdallāh Khān のアミールであった Qanbar Bī なる人物は、当時（994/1585–6年）Shahrisabz の支配権・ハーキム職（ḥukūmat）を iqṭā‘ として（dar vajh-i iqṭā‘）⁽¹⁹⁾有していたが、彼が失脚すると、‘Abdallāh はその後任として、「Shibarghān vilāyat の支配者であった高位のアミール ‘Abd al-Ṣamad Bī を、Qanbar Bī のあと空位であった Shahrisabz のハーキム職（ḥukūmat）に定めた。そして、ハーキム職に付随して、Shahrisabz の収入より、彼の為に別に15万 khānī（tenge）⁽²⁰⁾を定めた」という。⁽²¹⁾こうした記事より Ахмедов は、iqṭā‘ 受領者が、ある地域の行政支配権とともに、そこか

らの税収入の一部を受け取る権利を持っており、例外的には、ある地方の全税収入を自分のものとした場合もあったと考えている。すなわち、上述の Qanbar Bi が、Shahrisabz の残りの収入も自分の俸給（‘ulūfa）に付け加えられることを望んだとの記事、あるいは997（1588/89）年に、Balkh の支配者 ‘Abd al-Mu’min が Shāh Muḥammad Bahādur 某を、Maimana をはじめとする地域の支配者とした際に、それらの地方の全収入を、Maulānā Ṣāhib Divān が20万 ⁽²²⁾tenge に定めたとの記事は、それを証明するものであるということである。上述した記事のうち、‘Abd al-Ṣamad の場合、Shahrisabz が iqtā’⁽²²⁾として彼に授与されたとは明記されていない。また、Shāh Muḥammad 某の例も同様である。それ故、これらをただちに議論の根拠とするのは憚られるものの、Qanbar Bi の例のみからも、iqtā’ 受領者にその地域の税収入を受け取る権利が与えられていたことは明らかであろう。

次に、iqtā’ が如何なる時に授与されたかであるが、ある人物の勲功に対する恩償として与えられるのが普通である。‘Ubaidallāh-nāma には、軍事遠征に出発する前に、アミールらの覚悟の程を聞いたハンが、iqtā’⁽²³⁾を加増した例が見られる。その他、授受の事情がはっきりしない例や、具体的な経緯が記されていない場合も多いが、いずれにしても、受領者はハンにとって必要な人物、ハンの覚えめでたい人であったことは間違いない。Ахмедов は、このように下賜された iqtā’ が、ハンの意向によって増減されたり没収されたりする場合もあったとして、まず Özbeg Sulṭān の例を挙げる。Özbeg は一旦 ‘Abdallāh Khān に背いた為に iqtā’ を没収され、その後、赦しを乞うて忠勤に励み幾つかの地方を授与されたものの、結局、以前の iqtā’ を再び手に入れることはできなかった。彼の名は、16世紀末に行なわれた東トルキスタン遠征の指揮者として、他の史料にもその名が見えており、‘Abdallāh 政権のもとで活躍した人物であるが、そのように権勢を誇っていた王族であっても、ハンによって iqtā’⁽²⁴⁾の差し押さえや削減を受けた好例として引用されている。ほかに、‘Ubaidallāh-nāma には、前述の如く出征前に家臣の iqtā’⁽²⁵⁾を加増した例もあり、Ахмедов が結論①で「条件付き一時的」と言っているのは、以上のような事例を踏えた見解であろう。しかしながら、Özbeg Sulṭān の例は君主に背いた特殊な状況下での現象であり、これを以って直ちに iqtā’ の一般的性格に敷衍させることはできまい。また、史料が限られている現在、iqtā’ が世襲領として意識されていたか否かについても、それを判断する材料は充分ではない。も

っとも M. Haider は、iqṭā' をも含めた分与地が⁽²⁶⁾17世紀の中頃以降「世襲財産」化する傾向にあったと述べている。

iqṭā' 保有者には、その見返りとして何が要求されたのであろうか。第一に軍事奉仕が挙げられる。Ахмедов は Baḥr al-asrār に記述されている諸事件——シャイバーニー朝の末年に、Mā warā' al-nahr の混乱に乗じて侵入したカザク軍に対して、王朝最後の君主 Pir Muḥammad II が、Bukhārā, Samarqand, Neseф, Shahrīsabz, Ḥiṣār, Kūlāb の iqṭā' 保有者を結集してこれを撃退した件、1607年に、ジャーン朝の Vali Muḥammad Khān が、Mā warā' al-nahr の42人の iqṭā' 保有者の参加を得て、叛徒の拠る Kūlāb に遠征し、敵に勝利して豊富な戦利品を獲得し帰還した件、1611年に Imām Qulī Khān が Mā warā' al-nahr の iqṭā' 保有者の広汎な支持を得て Vali Muḥammad Khān を破った件——を例にとって、iqṭā' 保有者が授与者の命に従って軍事行動に参加する義務を負っていた点を指摘している。⁽²⁷⁾ iqṭā' 保有者のもう一つの義務として、M. Haider や Ахмедов は租税 (kharāj) の一部の国庫への納入を挙げている。⁽²⁸⁾ これは前述の如く、iqṭā' 保有者にある地域の税収入の一部が取り分として定められていた故、残部が国庫へ納められたと判断したと理解される（結論④）。

以上、Ахмедов 論文の紹介と細部での訂正を行ないつつ、16～18世紀のウズベク史料に登場する iqṭā' の共通項を探ってきた。これより、当時の iqṭā' は、王朝の主権者が王族や高位の遊牧貴族の勲功に対し、軍事奉仕および税の一部の国庫への納入義務を条件として、ある地方の支配権と税収入の一部の獲得権とを下賜したものと、ほぼ結論できよう。Ахмедов の研究は、該時代の iqṭā' と soyūrghāl, tankhvāh とが異なるものであるとして、従来の学説を否定するところから始まり、史料を丹念に分析して iqṭā' の性格を浮き彫りにし、軍事イクター制開始当時の iqṭā' のイメージを払拭した点に意義がある。しかしながら、史料の制約上、この iqṭā' が当時の中央アジア社会において如何なる位置を占めていたのか、また、最も興味深い問題として、何故一旦姿を消した術語がこの時期に再び史料に登場してきたのかといった点について考察するには至らなかった。また、彼の見解自体にも問題点が含まれているように思われる。次章ではそれを取り上げて検討し、iqṭā' と呼ばれていたものの実体を探ってみたい。

III

ここでは、Ахмедов が *iqṭā'* と *soyūrghāl* とを比較検討した際に、16世紀においては両者は同一のものであったが、17世紀以降、*soyūrghāl* の性格が変化した為に、全く異なる対象を指すようになったとした点について考えてみる。

Sharaf-nāma には、16世紀後半のシャイバーニー朝治下で、ある人物の *iqṭā'*、あるいは *soyūrghāl* となっていた都市名や地方名が登場する。それを拾っていくと、例えば、Qarshi は Sāghraj tūmān とその周辺ともども Qilich Qara Sultān の *soyūrghāl* であったが、その後 Sāghraj は 'Ibadallāh Sultān の *soyūrghāl* となった。Shahrisabz は Abū al-Khair Sultān の *iqṭā'*、のちに Qanbar Bi の *iqṭā'*、次いで、そこの支配権は 'Abd al-Ṣamad Bi へと移る。Ferghāna は Isfandiyār Sultān の *soyūrghāl*、Kulāb は Özbeg Sultān の *iqṭā'*、Khajakat は Shah Naẓar Bi Qarluq の *soyūrghāl*... というように、両者は同じ context において何の区別もなしに登場する。また、カザク族の Shighāi Khān に与えられた Khojand は、ある箇所では彼の *iqṭā'* と、また別の箇所では彼の *soyūrghāl* と記されている。⁽²⁹⁾ Sharaf-nāma において、*iqṭā'* と *soyūrghāl* とが同義語として使用されていることは確かで、Ахмедов の言葉を裏付けている。しかしながら、17世紀以降両者はそれぞれ別のものを指すとして、彼が *soyūrghāl* の特徴とした、'ulamā' や sayyid といったイスラーム聖職者に対する恩賜は、Haider の記述する如く、⁽³¹⁾ シャイバーニー朝の初期、既に16世紀初頭の Shaibāni Khān の時から見られる。下って16世紀中頃には、Naurūz Aḥmad Khān が Sayyid Shams al-Dīn Muḥammad Khurāsāni らに、トルコ石や鉄・銅の鉱山と Tashkent 地方の非灌漑地 (*yābsāt-i vilāyat-i Shāsh*) とを *soyūrghāl* として下賜している。⁽³²⁾ 16世紀後半に関する史料として、1052年 Muḥarram 月 (1642年3/4月) 付の Khvāja Bābā Naqshbandī に下された *soyūrghāl* 地確認の文書には、その土地は父親の Mullā Khvāja Arbāb の時に「'Abdallāh Khān より *soyūrghāl* として受領した」と述べられている。⁽³³⁾ また、986 (1578/79) 年付の Muḥammad Hāshim Sultān の勅許状 (*yarliḡh*) には、Ferghāna の Nūshāb 村にある土地の収穫のうち、 $\frac{2}{10}$ を *soyūrghāl* として Amir Ibrāhīm に支払うよう、住民に命じる内容が記されているほか、983 (1575/76) 年付の *yarliḡh* では、Khvāja Kalān qāḍī の土地は以前に *soyūrghāl*

として恩賜されたものである故、住民は彼に収穫の $\frac{2}{10}$ を渡すよう命じられている⁽³⁴⁾。このように、16世紀を通じて、sayyid や qādi, ナクシュバンディー教団の khvāja, さらに amir に土地が恩賜され、そこから上がる収入の一部が soyūrghāl として与えられていた事実が明らかとなってくるのである。Axmedov の主張する如く、soyūrghāl は16世紀後半の段階では iqtā' と同義の術語であるが、17世紀以降、その意味するところが変化したとの見解は誤りであると言わざるを得ない。すなわち、soyūrghāl の語は16世紀初頭より、勅許状等の文書史料を中心として、イスラーム聖職者や学者に対する、ある一定の耕地その他からの収入の一部の恩賜という意味で使用され、それが、ウズベク支配時代を通じて変わることなく弘通していたのである。換言すれば、Sharaf-nāma に現われる soyūrghāl は、文書等に見られる如き、ある権利を保証する、実体を伴った法律用語としての soyūrghāl とは異なる対象を指示していたのであり、その対象の違いは、Axmedov の言うような時代の推移による差ではなく、史料自体が内包している、その性格の差に求めなければならないのである。

それでは一体、年代記史料に見られる soyūrghāl はどのような意味で使われていたのだろうか。

soyūrghāl の語は、16～19世紀に東西トルキスタンで書かれた年代記に広く見られる。そして、一見してその本来の語義、すなわち「君主による恩賜」という一般的な意味で使用されているように見える。例えば、Shāh Maḥmūd Chorās の作品では、Ishik-gha 職や右翼長、さらに 蠡をソユルガルした (soyūrghāl kard)⁽³⁵⁾ と記されている。また、土地に関する例としては、まずシャイバーニー朝初期の史料である Shaibāni-nāma に、Shaibāni Khān がティムール朝を滅ぼしたのち、Mā warā' al-nahr をはじめとする占領地を一族功臣に分与する件が挙げられる。そこでは、「Herāt を Jān Vafā' Bī ni soyūrghāl qıldilar. Marv を Qanbar Bī Naiman ni berdilār」そして「Turkistān vilāyat を Küchkünji Khān ni berdilār. 首都の Samarqand と Shahrisabz と Miyānkāl vilāyat を Muḥammad Timūr Sultān ni 'ināyat qıldilar. Bukhārā vilāyat を Maḥmūd Sultān ni berdilār. Khvārazm vilāyat を Qoshchī Köpek Bī ni soyūrghāl qıldilar」⁽³⁶⁾ と、与えられた (berdilār) や恩寵を施された ('ināyat qıldilar) といった表現と並んで、ソユルガルされた (soyūrghāl qıldilar) という表現が使われている。上記のう

ち、Herāt と Khvārazm のみが他の地方とは異なる性格を持つ分与地であったとは考えられず、三つの表現は互いに synonym であったと思われる。同様の表現は Sharaf-nāma にも見られ、Khojand から Ush までの全 Fergāna を Isfandiyār Sultān にソユルガルした (soyūrghāl kard) と記されているほか、他の年代記においても同様である⁽³⁷⁾。このように、soyūrghāl は⁽³⁸⁾ いずれも、一族のスルターンや臣下たるアミール (ビィ) 等に対してある地方を与える場合に使用されており、それが一般的な恩賜の意味であったとの見解を支持しているように見える。

ところが一方で、soyūrghāl された土地に対して、その受領者は不入権を持っていたことを窺わせる記事が見られる。最も良い例としては、Shāh Maḥmūd Chorās が伝える、所謂カシュガル・ハン国における16世紀末の事件が挙げられよう。当時 Abū Saʿīd Sultān は、Yarqand の Muḥammad Khān より Kāshghar の支配を委ねられていたが、彼の師傅 (ataliq) であった Mīrzā Tengri Berdi は、ハンから派遣されてきた官吏に対して、「Khān がわが Sultān に恩賜された (soyūrghāl farmūda būd)」土地であるとして彼の入来を拒み、「君主たるものその勅書 (yarlīgh) に悖ってはならぬ」と言⁽³⁹⁾ってそれを追い返したという。また Sharaf-nāma には、Shah Naẓar Bī Qarluq の soyūrghāl 地へと、Özbeḡ Sultān の家臣が国庫への納入が定められた税の徴収にやって来た時、彼らを Shah Naẓar の部下が追⁽⁴⁰⁾い払ったとの記事が報じられている。こうした記述より、たとえ年代記に現われる soyūrghāl であっても、それは単に漠然と「恩賜された土地」を指すのではなく、その土地における受領者の権利が明確に意識されていたことを示しているのが明らかとなろう。とくに、Shāh Maḥmūd Chorās の記事は、この種の soyūrghāl を授与する際にも yarlīgh によって、その権利を保証していたことを示唆しており、非常に興味深い。16世紀以降の年代記に登場する soyūrghāl が上述の如き性格を有しているのであれば、それは、君主が「功績のあった臣下に対しある一定の地域をソユルガル (恩賜地) として下附し、その地域での裁判権・租税徴収権等」を「世襲的に認め」たティムール朝⁽⁴¹⁾の soyūrghāl、あるいは金帳ハン国のその⁽⁴²⁾の伝統をひいていたとする通説を受け入れても間違いなからう。本章の冒頭で、Sharaf-nāma に見られる iqṭāʾ が soyūrghāl と同義であったと述べたが、それを保有していた者の権利は、Ⅱ章で結論した如く、現在確認できる範囲では、その地域の支配権と税収入受領

権であった。以上より、16世紀の後半に再び史料に姿を見せた *iqṭā'* は、前時代の *soyūrghāl* の系譜上に位置するものであって、決して、軍事イクター制下の *iqṭā'* と短絡的に結びつけるべきではないことが明らかになったと思われる。

さて残る問題は、先に *Shaibāni Khān* による占領地の分与について述べた際に、「与える」「恩寵を施す」といった一般的表現が *soyūrghāl* と synonym であったとした点である。この問題の解決に極めて示唆的と思われるのが、Bacqué-Grammont の紹介する *Topkapı Sarayı* の古文書である。これは、各地を分与されたシャイバーニー朝王族の、三代目君主 *Abū Sa'id Khān* (1530-33) 時代の状況を示した一覧表である。例えば、「*Samarqand* の *Khān*, *Abū Sa'id Khān*, 7万の兵があるようだ。*Bukhārā* の *ḥākim*, 'Ubaid Khān, 7万の兵があるようだ。*Rātbiyya* (*Ura-tepe*) の *ḥākim*, 'Abd al-Laṭif Sulṭān, 3万。*Turkistān* の *ḥākim*, 'Abdallāh Sulṭān, 2万。*Balkh* の *ḥākim*, *Kistān Qara* [*Sulṭān*], 1万…」と、地名とその支配者名、そして兵力が記されているが、注目されるのは、*Abū Sa'id* を除き各地の支配者が *ḥākim* と呼ばれている点である。ここで想い出されるのが、先に引用した *Sharaf-nāma* の *Qanbar Bī* に関する記事である。そこでは、彼が *Shahrisabz* の *ḥukūmat* (ハーキム職・支配権) を *iqṭā'* として保有していたと記されていた。このように、検討した史料はすべて、シャイバーニー朝時代を通して、ある地方の支配権が一族功臣に対して委譲され、それを彼らが保有していたことを示している。*soyūrghāl* あるいは *iqṭā'* の語の有無にかかわらず、こうした記事は、いずれも同じ内容を述べたものと理解してよからう。先に、'Abd al-Ṣamad Bī がハーキム職に任じられたとの記述を引用した際、*iqṭā'* の性格を考える為の材料から外したが、ここに至って、これも同タイプの下賜と考えられることが明らかとなったのである。

IV

以上検討してきたことをまとめてみれば、次の結論がえられよう。

まず、中央アジアにおいて、16～18世紀の史料に *iqṭā'* の語を以て表わされている内容は、王朝の主権者が、勲功のあった王族および顕要な遊牧貴族に対し、軍事奉仕と税の一部の国庫への納入とを条件として、ある地方における、税収入の一部の獲得権を伴った支配権を下賜したものであった。第二に、この

時代の *iqṭā'* は、*tankhvāh* あるいは、ウズベク支配時代を通じて勅書や文書等に現われる *soyūrghāl* ——前者は軍人・兵士等に対して、後者はイスラーム聖職者や文人に対して下賜された、ある土地の税収入の獲得権——とは性格を異にするものであったが、年代記に主として登場する *soyūrghāl* の語とは同義であった。第三に、それは前時代の *soyūrghāl* の系統上に位置し、軍事イクター制下の *iqṭā'* とは短絡的に結びつくものではない。以上である。

しかしながら、これで問題がすべて解決した訳ではない。というのは、*Sharaf-nāma* に、992 (1584/85) 年に起きた *Badakhshān* 地方の叛乱に対して、‘*Abdallāh Khān* は「*vilāyat-i Badakhshān* に *iqṭā'* を持っている神の御加護に支えられた軍人たち (*‘asākir-i manṣūri*)」を、叛乱軍鎮圧の為に派遣したとの記事が見えているからである。⁽⁴⁴⁾ *Ахмедов* はこれに全く言及していないが、*Иванов* は、同じ *Sharaf-nāma* に見られる、959 (1552) 年に行なわれた遠征に勝利したあと、‘*Abdallāh Khān* が「*Nesef* の村々のうち若干を、常勝軍 (*lashkar-i ṣafar-athar*) の *tankhvāh* と為した」との記事と、⁽⁴⁵⁾ 上に引用した部分とを比較して、*iqṭā'* と *tankhvāh* とが「全く同一タイプの下賜」であったと主張している。⁽⁴⁶⁾ *Ахмедов* が *Иванов* の主張を否定しつつも、その論拠について一言も無いのは全く不可解である。同種類の記述は、*Sharaf-nāma* その他の史料には見られないが、この一例だけは上述した結論と矛盾している。ほかに、*Baḥr al-asrār* には、前時代の歴史的イベントを記述する際に *iqṭā'* の語を使用している例がある。それは、15世紀の中葉、ウズベク族に逐われたカザク族が「*Esen Bugha* [*Khān* の領地] と *Yūnus Khān* の *iqṭā'* との間」の地域に移住したとの件と、⁽⁴⁷⁾ 1468年に *Abū al-Khair Khān* が歿した時に、*Shaibānī Khān* と弟の *Maḥmūd* は *Ḥajitarkhān* (アストラハーン) へと難を避けていたが、そこから、ウイグル族の「*Qarachin Bahādur* は皇子らを連れ出し、自分の *iqṭā'* へと向かった」との記事である。⁽⁴⁸⁾ これらの出来事を伝える、*Baḥr al-asrār* 以前の諸史料には、*iqṭā'* の語は使われておらず、また 上述の二例は、先に述べた結論とは趣きを異にしている。

Sharaf-nāma の例に関しては、明確な解答を準備していないが、少なくとも、この一例を以って、当時の中央アジアにおいて、軍人に対して土地を与える *iqṭā'* 制が施行されていたとは言えまい。あるいは、*Иванов* の言うように、17世紀以後の文書類では、すっかり *tankhvāh* の語を以って定着した軍人に対する下賜が、ここでは、*tankhvāh* または *iqṭā'* と二様に呼ばれているのか

もしれない。年代記に往々にして見られる用語の混乱があったと考えるのである。用語の不統一は、Baḥr al-asrār の場合にもいえよう。Ахмедов は、この作品において作者は、soyūrghāl と記載した場合、その土地の受領者をイスラーム聖職者や文人に限っていたとしているが、同史料の地理志の部分で、Chaghatai Khān の所領を soyūrghāl と呼んでおり、⁽⁴⁹⁾ iqtā‘ も soyūrghāl も、前時代の出来事を伝える場合に限られてはいるものの、若干広い範囲に適用しているように見える。Петрушевский や Иванов が、詳しい考察はなかったものの、該時代における iqtā‘ を「正確な法律用語ではない」「文語的表現」と結論づけたのは、iqtā‘ の用例が少なく、文書類からこの語が発見されていない現在、一面では依然として妥当性を持っていると言えよう。

最後に、疑問として残るのは、何故しばらく姿を消していた術語 iqtā‘ が、16世紀末の Sharaf-nāma に再び登場するのかということである。古典に通じていた作者が、文学的表現の為に、蘊蓄の一端を傾けたまでのことであろうか。あるいは、‘Abdallāh Khān が中央集権化を進めていった当時の情勢を反映したものであろうか。確かに、管見の及ぶ範囲では、tankhvāh の語が初めて現われるのも、この Sharaf-nāma である。先に示した、史料内における矛盾を解く鍵も、このあたりに隠されているかもしれない。しかしながら、これらは16世紀後半の政治史を多方面より検討したのちに、再び考えるべき問題であろう。紙幅も尽きたので、別稿に譲ることとしたい。

[小論は昭和55年度の第22回日本オリエント学会大会および昭和57年7月の京都大学乾燥アジア談話会で口頭発表した原稿に加筆し、一部を訂正したものである。両会において会員諸氏より貴重な助言を頂いた。誌して謝意を表す次第である。]

注

- (1) イクター制に関しては、佐藤次高、「イスラム封建制度論」(『岩波講座世界歴史』8, 1969)をはじめとする同氏の一連の論考等を参照のこと。ガザン・ハンのイクター制については、本田實信、「イルカン国に於ける IQTĀ‘ 制に就いて」(『北海道大学文学部紀要』7, 1959)；同氏「ガザン＝カンの税制改革」(『同前』10, 1961) 参照。
- (2) 現在知られているところでは、Ḥāfiẓ Tanīsh, *Sharaf-nāma-yi Shāhī* (‘*Abdallah-nāma*’) に初めて見られる。これは、シャイバーニー朝で最も英邁な君主といわれる ‘Abdallāh II に捧げられたペルシア語年代記で、彼の存命中、回暦998 (1589/90) 年に着手された。ノアより回暦 997 (1588/89) 年までの諸事件を扱っている。

写本は多くの存在が確認されているが、小論では、本田實信教授の御好意により入手しえた India Office Library 所蔵本 (Ethé Catalogue No. 574) と British Library 所蔵本 (Or. 3497) とのマイクロフィルムよりのゼロックス・コピーを利用する (詳細は、Ч.А. Стори, Персидская литература. Био-библиографический обзор. Перевел с английского, переработал и дополнил Ю.З. Брегель, часть II, Москва 1972, стр. 1129-1133 参照)。17世紀にはいって, Maḥmūd Vali, *Baḥr al-asrār fī manāqib al-akhyār* に、しばしば iqtā' の語が登場する。著者は Balkh においてジャーン朝 (アストラハーン朝) の Nadir Muḥammad Khān に仕え、1044 (1634/35) 年に著述に着手し、1050 (1640/41) 年以降に完成している。ペルシア語で書かれた博物誌・年代記で、fātiḥa と7つの mujallad (それぞれが4つの rukna に分れる) および khātima から成っていたが、現存が確認されているのは、fātiḥa と mujallad の I (天地創造と世界の諸要素)、VI (モンゴル史) のみである。写本のうち、India Office Library 所蔵本 (Ethé No. 575) は著者の自筆写本で、mujallad VI—rukna (4) (1050/1640-41 年までのジャーン朝史) と mujallad VI の khātima (トルコ諸族の起源と著者のインド旅行記) を含んでいる。タシュケントの東洋学研究所に保存されている写本は、いずれも18-19世紀のもので、それぞれ欠落部分があるが、No. 2372 は fātiḥa と mujallad I—(3)(4), No. 1375, 1385, 7418 は mujallad VI の(4)を除いた部分を持っている (Ч.А. Стори, там же, стр. 1135-1138; Махмуд ибн Вали, Море тайн относительно доблестей благородных (География). Введение, перевод, примечания, указатели Б.А. Ахмедова, Ташкент, 1977, стр. 3)。テキストの一部は、В.В. Бартольд が“Отчет о командировке в Туркестан,” *Сочинения* VIII, стр. 170-196 で VI-(2)(3), “Цереманиал при дворе узбекских ханов в XVII веке,” *Сочинения* II-2, стр. 388-399 で VI-(4)を解説と露語訳を付けて刊行しているほか、最近 Б.А. Ахмедов が I の地理志の露訳をファクシミリを添えて発表している (Махмуд ибн Вали, там же)。ほかに、Материалы по истории Казахских ханств XV-XVIII веков, Алма-Ата, 1969, стр. 320-363; 547-552; に VI-(3)(シャイバーニー朝史)の露語抄訳が収められている。18世紀初頭に書かれた 'Ubaidallāh-nūma は、Mir Muḥammad Amin Bukhārī の作品で、'Ubaidallāh Khān (1123/1711-12年歿)の治世と、その直後の諸事件を扱ったペルシア語の年代記である。iqtā' の語は作品中わずかしき認められない。А.А. Семенов による露語訳、Мир Мухаммад Амин-и Бухари, Убайдулла-наме. Перевод с таджикского с примечаниями А.А. Семенова, Ташкент, 1957 で利用できる。ウズベク諸王朝で書かれた史料で、管見の及ぶ限りでは、以上三つの年代記に iqtā' の語が見られる。サファヴィー朝史料の iqtā' については注(3)参照。

- (3) И.П. Петрушевский, Очерки по истории феодальных отношений в Азербайджане и Армении в XVI-начале XIX вв., Ленинград, 1949, стр. 185-186.
- (4) П.П. Иванов, Хозяйство джуйбарских шейхов. К истории феодального землевладения в Средней Азии в XVI-XVII вв., Ленинград, 1954, стр. 27.
- (5) М.А. Абдураимов, Очерки аграрных отношений в Бухарском ханстве в XVI-первой половине XIX века, том 2, Ташкент, 1970, стр. 113.
- (6) tiyūl に関しては, V. Minorsky, Tiyūl, *EI* iv, pp. 799-801 参照。この時代の中央アジアでは、tiyūl は数例がワクフ文書に見られる程度である (Р.Г. Мукми-

- нова, К истории аграрных отношений в Узбекистане XVI в. По материалам “Вакф-наме”, Ташкент, 1966, стр. 188; Самаркандские документы XV-XVI вв. (О владениях Ходжи Ахрара в Средней Азии и Афганистане). Факсимиле, критический текст, перевод, введение, примечания и указатели О.Д. Чеховича, Москва, 1974, стр. 121–124, 247, 334)。尚, 中央アジアの tiyūl については, Р.Г. Мукминова, “К характеристике феодального института ‘тийул’ в Средней Азии,” *Формы феодальной земельной собственности и владения на Ближнем и Среднем Востоке*, Москва 1979, стр. 121–126 で詳しく論じられている。
- (7) Абдураимов, там же, стр. 112.
- (8) M. Haider, *Agrarian System in the Uzbek Khanates of Central Asia, 16th-17th Centuries*, *Turcica* VII, 1975, pp. 165, 163–164. この論文は, 文献の引用や術語の記述等で, 誤植・誤解が目につく。参照には注意を要する。
- (9) Б.А. Ахмедов, “Йкта в Средней Азии в XVI-начале XVIII в.,” *Формы феодальной земельной собственности...*, стр. 15–24.
- (10) Maḥmūd b. Valī, Baḥr al-asrār, MS. India Office Library, Ethé No. 575, ff. 354 a, 355 b, 365 b, 372 a-372 b. Ахмедов, там же, стр. 16–17.
- (11) М. Абдураимов, Вопросы феодального землевладения и феодальной ренты в письмах Эмира Хайдара, Ташкент, 1961, стр. 12–18; он же, *Очерки аграрных отношений...*, стр. 103–109.
- (12) Б.А. Ахмедов, там же, стр. 17–18.
- (13) Абдураимов, *Вопросы феодального землевладения...*, стр. 18–24; он же, *Очерки аграрных отношений...*, стр. 112–124.
- (14) Ахмедов, там же, стр. 17. 原文は, Абдураимов, *Очерки аграрных отношений...*, стр. 112 прим. 459 参照。
- (15) Ахмедов, там же, стр. 22.
- (16) Ḥafīẓ Tanish, Sharaf-nāma-yi Shāhi, MS. India Office Library, Ethé 574, ff. 313 a-313 b. Ахмедов, там же, стр. 20.
- (17) Ḥafīẓ Tanish, Sharaf-nāma, MS. India Office, f. 445 a.
- (18) Ахмедов, там же, стр. 21–22.
- (19) Ḥafīẓ Tanish, Sharaf-nāma, MS. British Library, Or. 3497, f. 234 a.
- (20) Абдураимов, *Очерк аграрных отношений...*, том 1, 1966, стр. 56.
- (21) Ḥafīẓ Tanish, Sharaf-nāma, MS. British Library, f. 234 b; India Office, f. 454 b.
- (22) Ахмедов, там же, стр. 18–19.
- (23) Мир Мухаммад Амин-и Бухари, Убайдулла-наме, стр. 102.
- (24) Шах-Махмуд ибн Мирза Фазил Чурас, Хроника. Критический текст, перевод, комментарии, исследование и указатели О.Ф. Акимускина, Москва, 1976, (текст) стр. 24–28.
- (25) Ахмедов, там же, стр. 19–20.
- (26) M. Haider, op. cit., p. 167.
- (27) Ахмедов, там же, стр. 19.

- (28) Там же; M. Haider, op. cit., p. 163.
- (29) Ḥaḥīz Tanish, Sharaf-nāma, India Office, ff. 67 b, 104 b, 165 a, 454 b, 385 b, 481 b, etc.
- (30) Ibid., ff. 313 b, 315 b.
- (31) M. Haider, op. cit., p. 163.
- (32) Зайн ад-дин Васифи, Бадаи‘ ал-Вакаи‘. Критический текст, введение и указатели А.Н. Болдырева, том II, Москва, 1961, стр. 1327–1332; Абдураимов, Очерки аграрных отношений..., том 2, стр. 20–21. yābis 地に関しては, А. Егани, “Значение термина ‘йабис’ и института ‘йабиси’ в Средней Азии XV–XIX вв.,” *Формы феодальной земельной ...*, стр. 63–96. で, 詳しく論じられている。
- (33) Материалы по истории Ура-тюбе. Сборник актов XVII–XIX вв. Составление, перевод и предисловие А. Мухтарова, Москва, 1963, стр. 15.
- (34) Абдураимов, Очерки аграрных отношений..., том 2, стр. 110–111.
- (35) Шах-Махмуд Чурас, Хроника, (текст) стр. 24, 64, 67, 99.
- (36) Шейбаниада, История Монголо-Тюрков на джагатайском диалекте, с переводом, примечаниями и приложениями изданная И. Березиным, Казань, 1849, (текст) стр. 91. Shaibāni Khān による占領地の分与に関しては, Kamāl al-Dīn ‘Alī Benā’i, Shaibāni-nāma に, 本文に引用したものととは大幅に内容の異なる記事が見られ (Материалы по истории Казахских ханств XV–XVIII веков, стр. 127), 問題を残している。シャイバーニー朝時代の王族の支配地および系図については, フランスの Bacqué-Grammont の研究が有益である (J.-L. Bacqué-Grammont, Une liste ottomane de princes et d’apanages Abu’l-Khayrides, *Cahier du monde russe et soviétique*, vol. XI no. 3, 1970).
- (37) Ḥaḥīz Tanish, Sharaf-nāma, India office, f. 385 b.
- (38) Шах-Махмуд Чурас, Хроника, (текст) стр. 23, 25, 32, 53, 68, 77, 82, 88; Zubdat al-āthār (Материалы по истории Казахских ханств..., стр. 133); Ta’rikh-i Kāshghar (там же, стр. 403); Firdūs al-Iqbāl (там же, стр. 443).
- (39) Шах-Махмуд Чурас, Хроника, (текст) стр. 25.
- (40) Ḥaḥīz Tanish, Sharaf-nāma, India Office, ff. 481 b–482 a.
- (41) 間野英二, 「ティムール朝の社会」(『岩波講座世界歴史』8) 304 頁。ティムール朝, トルコマン両王朝, サファヴィー朝の soyūrghāl に関しては, 本田實信, 「イルカン国に於ける IQṬĀ‘ 制について」54 頁, 注103, および, 同氏が昭和52年11月27日に開催された「日本オリエント学会第19回大会」の「イクター制に関するシンポジウム」で発表された際の handout を参照のこと。
- (42) Б.А. Ахмедов, Государство кочевых узбеков, Москва, 1965, стр. 93.
- (43) J.-L. Bacqué-Grammont, op. cit., pp. 430–431.
- (44) Ḥaḥīz Tanish, Sharaf-nāma, India Office, f. 445 a.
- (45) Ibid., f. 67 b.
- (46) П.П. Иванов, там же, стр. 27.
- (47) Материалы по истории Казахских ханств..., стр. 352. 尚これについては, 拙稿「ウズベグ族とカザク族の「分離」について」(『宋元代の社会と宗教の総合的

研究研究報告』（代表者竺沙雅章）1980）53-63頁参照。

- ・(48) Материалы по истории Казахских..., стр. 363. この間の事情に関しては、
拙稿「シャイバーニー・ハンとアルターク城」（『史林』第62巻第6号）50頁参照。
・(49) Махмуд ибн Вали, Море тайн..., стр. 16; текст 1.